

「未来の教室」を創る、校長先生たちの本気！

ICTと生成AIが拓く、新しい学びの姿を求めて

27

9 JUN. 2026

自校の課題を明確にする

伊那市学校教育の情報化ビジョンに関する事前アンケート

④ デジタル・シティズンシップ（情報モラル）

⑧ 校務DXの推進

③ ICTを効果的に取り入れて授業改善に取り組む

⑦ 授業改善に関する研修の機会を充実

① 子どもの「知りたい」「わくわく」「好き」を重視

⑤ デジタル環境による個別最適な学び

② 教科における探究の充実

⑥ クラウドを活用した対話的な学び

	④	⑧	③	⑦	①	⑤	②	⑥	2026	2025	2024
A 中	100	100	90	85	100	80		60	715	720	574
B 中	90	99	90	80	80			75	669	640	540
A 小	90	90	80	80	80			0	660	600	580
B 小	90	90	70	80	80			0	600		590
C 小	80	70	70	90	80			60	590		420
C 中	90	80	80	70	70			60	570		556
D 小	90	90	70	90	70						490
E 小	100	90	100	50							455
F 小	90	75	70	85							470
D 中	95	70	70	70							510
G 小	90	70	80	70							430
H 小	90	60	60	70							520
I 小	80	75	60								490
J 小	85	60	70								394
K 小	80	70	60								490
L 小	80	80	65	50	65						390



伊那市の全小中学校の校長先生（学校CIO）が集まり、研修会「CIO EDUtech 2026」が開催されました。スクールタクトを活用するなどしてリアルタイムに意見を交わす熱気あふれる研修会となりました。

研修の中では、自校のICT活用の現状をデータに基づき客観的に分析し、次期ビジョンに向けた課題を真剣に議論しました。

また、講師の東原義訓信州大学名誉教授により「生成AIが『有能な秘書』として私たちを支える最新事例や、深い学びの鍵となる「中核的概念」の理解などのお話をいただきました。

「自らも学び続け、変化する時代に即した学校を創りたい」という校長先生たちの強い決意は、これからの学校づくりを力強く牽引していきます。

1. 自校の現状把握と課題の明確化

アンケート結果の可視化により、自校のICT活用の進捗や課題が客観的に示されました。

他校との比較や共通の課題を知ることで、自校が今後どの項目に注力すべきかが明確になったという声が多く聞かれました。

得られた分析結果を研究主任や全教職員と共有し、対話を通して学校全体の共通理解を図ることで、エビデンスに基づいた学校経営や授業改善の方向性を定めていく重要性が再認識されていました。

2. 「深い学び」と探究プロセスの具体化

「中核的概念」の理解が、バラバラな知識を統合し学びを深める鍵であるという点に多くの納得感が寄せられました。

4つの探究レベルやプロセスの整理により、具体的な授業場面でのICT活用のイメージが明確になっています。

教科の枠を超えた探究のヒントを得たことで、子供の「なぜ」や「やってみたい」を起点とした授業への転換や、学びの過程を蓄積するデジタルノートの活用に意欲を示す感想が目立ちました。

3. AIの進化とこれからの教育ビジョン

生成AIが「エージェント」へと進化する現状に驚きつつ、その教育的活用の可能性に高い関心が寄せられていました。

2040年の社会を見据え、AI時代に求められる人材育成や、教員の働き方改革への活用を不可欠と捉える意見が多く見られます。

最新技術がすぐに過去のものとなる現状を捉え、管理職自らが率先してICTに関わり学び続け、時代の変化に合わせた教育ビジョンを更新していく姿勢が示されていました。

この枠内は、校長先生からの感想をもとにセンターがまとめさせていただきました。

※ ビジョンの中から8つの観点を抜き出して、その達成率を校長先生が自己評価した。項目毎に合計し伊那市としての達成率を算出した。達成率の高い項目から順番に上から並べてみた。このことから、伊那市全体としての課題は「⑥クラウドを活用した対話的な学び」であることがわかる。